〈研究ノート〉

食イメージ，食態度，食行動の交差文化研究：日本，韓国，台湾[1]

今　田　純　雄[2]

（受付　2012 年 10 月 29 日）

1.　は　じ　め　に

韓国，台湾そして日本の諸都市を歩くと，若者の行動パターンがあまりにも似ていることに驚かされる。同じような髪型，化粧，服装をし，歩きながら携帯電話やスマートフォンを操作し，耳にはイヤーフォンが差し込まれている。マクドナルドやスターバックスに入っておしゃべりを楽しんでいる様子は，飛びかっている言葉こそ違え，見た目には国境というボーダーラインがなくなったかのような印象である。

これら３ヶ国の都市部に目立つ店舗は，ファーストフードとコンビニエンスストアーである。誰もが気軽にそれらの店舗に入り，食事をとり，飲料・食品などを購入していく。ファーストフードとコンビニエンスストアーの発祥の地はアメリカでありながら，これらはアジア諸都市においてアメリカ以上の発展を遂げているようだ。若者にとってはあまりにも身近な存在であり，今や彼ら（彼女ら）の生活にとって切っても切り離せない存在となっている。

しかしいずれの都市にあっても一歩裏筋に入ると風景は一変する。日本のみならず韓国，台湾も同様に，戦後のブラックマーケットがそのまま生き残ってきたと思われる飲食店が都市のあちこちに残っている。そういった店舗で供される料理には総じてローカル色が色濃く残っており，中高年齢世代の憩いの場ともなっているようである。

このように見ていけば，少なくとも日本，韓国，台湾に共通して言えることは，ライフスタイルの諸相において，若者世代と中高年世代間には断絶があり，さらに，若者世代には国境を越えて共通するライフスタイルがあるということである。はたして日韓台３ヶ国の若者にはどこまでの共通性あるいは類似性が見られるのだろうか。

本調査は，日本，韓国，台湾３カ国の大学生を対象に，食物に対する態度，感情，食習慣

1　本研究結果の一部は2009年の日本心理学会第73回大会において，「食物イメージ，食態度，食習慣の日韓台比較」（今田純雄・田崎慎治・根ヶ山光一・チャールズ・プリブル）とのタイトルで発表された。

2　本稿をまとめるにあたり，日本学術振興会科学研究費補助金（代表：今田純雄 23653215）より援助を受けた。ここに記して感謝する。

を比較することを目的に行われた。この調査で使用した設問は，もともとは日米比較を目的に考案されたものであり，その多くは Paul Rozin（Pennsylvania University）の発案による。しかしながら日米比較データは収集できていない。本稿では，日米比較に先立ち実施された，日韓台 3 カ国の大学生を対象とする調査結果を報告するものである。なお，この 3 カ国を選んだ理由は，３者が地理的，歴史的，文化的，民族的に近似するだけでなく，政治形態，経済発展の様相も比較的類似すると判断したためである。

2.　方　　法

2-1.　調査対象者

日本の大学生236名（男子69名，女子167名），韓国の大学生97名（男子55名，女子42名），台湾の大学生209名（男子98名，女子111名）が調査に参加した。平均年齢は，日本，韓国，台湾の順で，男子19. 7歳（SD: 1. 45，以下同），女子19. 2歳（1. 75），男子24. 8歳（1. 54），女子22. 7歳（1. 21），男子19. 5歳（2. 68），女子19. 3歳（2. 43）であった。

2-2.　質問紙

日本語ならびに英語による質問紙を同時に作成し，それらから韓国語・台湾語への翻訳をおこなった。翻訳された質問紙はその翻訳作業に携わっていない第 3 者によって逆翻訳（バック・トランスレーション）され，誤訳等のチェックが行われた。翻訳ならびに逆翻訳は両言語に十分な能力をもつ大学教員・留学生によって行われ，それぞれに謝金が支払われた。質問項目の詳細は結果とともに，「結果および考察」の項で述べる。

2-3.　手続き

日本（広島），韓国（SEOUL: ソウル），台湾（PINGTUNG: 屏東）にある 4 年制大学において2008年に行われた。韓国・台湾の調査においては，調査施行者に対して謝金が支払われた。日本での調査は授業の一環としておこなわれ，結果の一部が授業用教材として用いられた。

3.　結果および考察

3-1.　「食べもの」からの自由連想：食のイメージ

「食べもの」という言葉からどのようなイメージが喚起されるだろうか。またそのイメージにはどのような感情価（hedonic valance）が付随するのだろうか。「以下のそれぞれの言葉

について，はじめに頭に浮かんだ言葉をお書き下さい」と教示し，「食べもの」[3]と「自然（ナチュラル）」の２語を提示し，それらの言葉から連想される言葉を３つまで回答させた[4]。つづく設問において，「先ほど回答していただいた言葉について，それぞれが「プラスのものか（＋），マイナスのものか（－），どちらでもない（０）のいずれになるかについて，評価してください」と教示し，「なお，ここでいう『プラス』とは，あなたにとってよい印象やイメージ，『マイナス』とは，その逆に，あなたにとってよくない印象やイメージの言葉という意味です」との説明を付加した。

連想された言葉の多くは食物名，料理名であったので，食関連語（食物や料理の名称）と非食関連語（食物や料理の名称以外）に分類した。さらに，食関連語については，アジアに固有・特徴的な食物・料理（アジア食），西洋に固有・特徴的な食物・料理（西洋食），その他に分類し，非食関連語は，快不快感情に関連する語（快不快），健康に関連する語（健康），その他に分類した。

３ヶ国に共通して男子の方が女子よりも食関連語の連想率が高かった（日本：男子79.3%，女子65.5%；韓国：男子88.7%，女子79.4%；台湾：男子76.3%，女子72.3%）。３ヶ国間で比較すると，韓国は日本・台湾以上に食関連語の連想率が高く（韓国，台湾，日本の順で84.7%，75.0%，69.7%），食関連語に占めるアジア食の比率は韓国，日本，台湾の順で67.9%，38.4%，33.5%であり，韓国の値がきわだって高かった。西洋食の比率は韓国，日本，台湾の順で5.6%，23.5%，23.6%であり，韓国の値がきわだって低かった。図１に，国・性別のアジア食ならびに西洋食の連想語生起比率（%）を示した。結果を要約すると，男子は女子以上に，「食べもの」から具体的な食物・料理を連想する傾向がつよく（食関連語の連想率が高く），さらに，韓国の大学生はアジア食を連想させる傾向が高いというものであった。

連想された言葉に対する感情価については，３ヶ国ともマイナス評価よりもプラス評価が多かった。第１連想語を「プラス」と評価した比率は，日本，韓国，台湾の順で87.6%，87.2%，63.8%であった。また第２連想語，第３連想語についても同様な傾向が見られた。一方で，第１連想語を「マイナス」と評価した比率は日本，韓国，台湾の順で4.2%，6.3%，23.0%であり，台湾学生の比率が際立って高かった。

実際に連想された言葉としては，「ご飯」「米」「白米」といった「コメ」関連語が３ヶ国に共通してもっとも多かった。続いて連想された言葉は，日本人学生は「おいしい」，韓国人学生は「キムチ」，台湾人学生は「麺」関連語であった（表１参照）。

これらの結果から，日本，韓国の大学生は「食べもの」に対してポジティブなイメージを

3　質問紙上で実際に用いた言葉は「食べもの」（日本）「음식」（韓国）」「食品」（台湾）であった。
4　本稿では「自然（ナチュラル）」に関する結果についてはふれない。

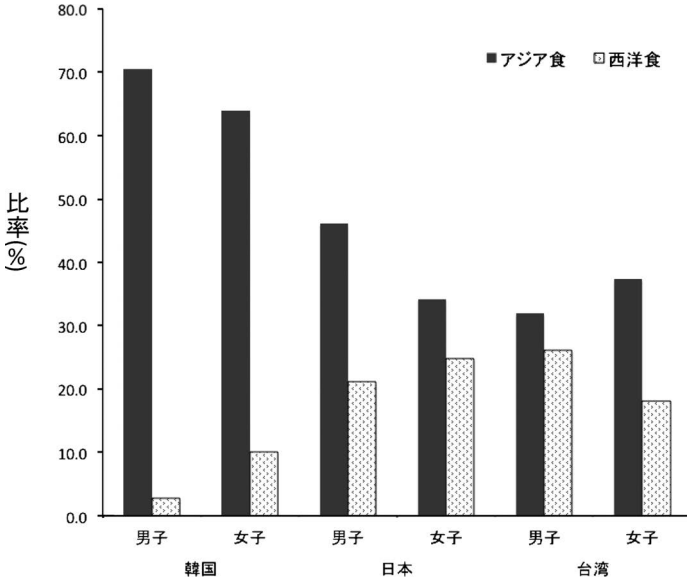

図 1 ：連想された食関連語の中でアジア食，西洋食が占める比率

表 1 ：自由連想された頻出語の出現率

連想語	韓国	%	日本	%	台湾	%
コメ*	40	13.6	68	9.6	47	7.6
キムチ	26	8.8	0	0.0	1	0.2
おいしい	2	0.7	39	5.5	15	2.4
麺**	9	3.1	26	3.7	36	5.8
総　数	294	100.0	707	100.0	619	100.0

*「米」「ご飯」「白米」などコメ関連語を含む
**「麺」「牛肉麺」「ラーメン」「ビーフン」「うどん」など麺・麺料理に関連する語を含む

抱いているが，台湾の学生は，日本，韓国の大学生と比較して，ネガティブなイメージを抱く傾向の高いことが判明した。また，3 ヶ国に共通して「食べもの」から第 1 に連想される言葉は「コメ」関連語であることが判明した。

3-2.　理想の食事

「あなたの最大の目標が，申し分のない食事をすることだとします。あなたは今，どこへでも（近くても遠くても）移動できて，いつの時代へも（過去，現在，未来を問わずに）移動できるものとします。この目標を実現させるために，あなたはいつの時代のどの場所へいきますか？また，その理由は？」と問い，時代，場所，理由を自由に記述させた。さらに，

「上記と同じ目標を実現させる為に，あなたが絶対に行きたくない場所，時代はどこですか？また，その理由は？」と問い，時代，場所，理由を自由に記述させた。

結果の分析にあたって，記載された内容を，時間（過去，現在，未来，その他）と空間（自国，アジア，西洋，その他）の２軸から分類し，さらにアジアについては，自国，自国以外のアジア，その他に分類した。結果を表２に示す。

表２：３カ国学生の「行きたい」時代と「行きたい」場所（%）

	時代			
	未来	現在	過去	その他
日本人学生	12.9	63.8	23.3	0.0
韓国人学生	9.1	40.4	50.5	0.0
台湾人学生	9.9	53.5	34.7	2.0

	場所				
	自国	アジア	西洋	レストラン	その他
日本人学生	64.5	2.6	14.7	11.7	6.5
韓国人学生	53.5	9.1	18.2	7.1	12.1
台湾人学生	12.6	53.3	17.6	2.0	14.6

日本人学生ならびに韓国人学生は，場所を「自国」とする比率が高く，台湾人学生は「自国以外のアジア」とする比率が高かった。ただしこの「自国以外のアジア」は「中国」であるケースが多かった。時代については，日本人学生と台湾人学生は「現在」の比率が高く，韓国人学生は「現在」よりも「過去」を選択する比率が高かった。時代，場所のそれぞれについて χ^2 検定をおこなったところ有意であった（時代：$\chi^2(6)=31.127$，$p<.001$，場所：$\chi^2(8)=222.080$，$p<.001$）。

国別の特徴をみていくと，まず日本人学生は「現在」の「自国（日本）」を記述する傾向が高いという特徴が見られた。例えば，「今の，日本の，高級レストランで」というケースである。食の現在に満足しているといえるが，歴史，諸外国への関心の低さを反映しているとも解釈できよう。韓国人学生は，「過去」の「自国（韓国，朝鮮半島）」を記述する傾向が高いという特徴が見られた。過去を理想化する傾向にあるといえよう。自国への愛着，帰属意識がつよいのでないかと思われる。一方で，台湾人学生で目立ったものは，「過去」の「アジア（中国）」と記述するケースであった。「過去」と記載した47事例中39事例（83%）が「中国」としていた。

行きたくない時代，場所について，日本人学生と韓国人学生は，「過去」の「自国」を選択する傾向が高かった（表３参照）。韓国人学生は自国の過去を否定する気持ちと肯定する

気持ちが葛藤しているように思われれる。同様な葛藤は台湾人学生についても観察される。台湾人学生で「現在」を選択した25事例中24事例（96％）が「中国」と記載したためである。すなわち台湾人学生は，中国の過去を理想とするが，現在の中国には否定的であるといえよう。時代，場所のそれぞれについて χ^2 検定をおこなったところ両者とも有意であった（時代：$\chi^2(6) = 16.773$，$p<.05$，場所：$\chi^2(8) = 78.62$，$p<.001$）。

表 3 ： 3 カ国学生の「行きたくない」時代と「行きたくない」場所（％）

	時代			
	未来	現在	過去	その他
日本人学生	4.7	21.0	71.2	3.0
韓国人学生	5.3	17.0	74.5	3.2
台湾人学生	9.0	27.4	56.2	7.5

	場所				
	自国	アジア	西洋	レストラン	その他
日本人学生	31.6	9.2	3.9	0.0	55.3
韓国人学生	30.8	7.7	9.9	3.3	48.4
台湾人学生	10.2	33.7	3.7	0.5	51.9

本設問は「食」に限定されたものであるが，食がさまざまな事象に対する隠喩（metaphor）としての機能を有すると考えれば，本調査結果は３ヶ国の大学生における時空間意識（価値観・評価）の違いを反映させるものと言える。すなわち，韓国の大学生は現状にやや否定的であり，過去を理想化する傾向が高い。台湾の大学生は，過去の中国を評価する一方で現在の中国には批判的である。両国の学生はそれぞれ「自国」に対して両価感情（ambivalent）をもっているといえる。これら２カ国の大学生に対して日本の大学生は現状に満足する傾向がつよいといえよう。

3-3.　食物観と身体観

「『からだ』と『食べもの』とはどのような関係にあるのでしょうか。これまで私たちは，世界のいろいろな地域で，そのことについて尋ねてきました。以下に示した比喩（たとえ）について，皆さんはどの程度，同意・賛成されるでしょうか。以下の基準に従って，０から６までの数字のいずれかを回答欄に書き込んで下さい。」と教示し，「全く同意できない」を１，「同意できない」を２，「あまり同意できない」を３，「やや同意できる」を４，「同意できる」を５，「強く同意できる」を６，「わからない」を０とする判断基準を示した。提示された比喩（たとえ）を表４に示す。

表４：５つの比喩

比　喩	設　問　文	想定される身体観・人間観	
木（TREE）	（身体は）木のようなものだと思う。木は，大地と太陽と空気から栄養を授かり，大きく豊かに成長していくから	生気論的	静的
自動車（CAR）	（身体は）自動車のようなものだと思う。自動車は，身体が食べものを必要とするように，そのエネルギーの元としてガソリンを必要とするから	機械論的	動的
工　場（FACTORY）	（身体は）工場のようなものだと思う。われわれが食べものを食べる時，身体のなかで，食物はこなごなにされ，そのすがたを変え，身体のさまざまな部位に運ばれ，エネルギーとして蓄えられるから	機械論的	静的
神　殿（TEMPLE）	（身体は）神殿のようなものだと思う。神殿の中には神がおり，食べ物はその神へのささげものとして注意して選ばれるのだから	聖　的	－
海（OCEAN）	（身体は）川・海のようなものだと思う。川・海は，動植物の命を飲み込み，そこから再び新たな命を生み出す存在であるから	生気論的	動的

本設問作成の意図は，食物との関係において身体をどのように理解しているかを探ることであった。すなわち食物と身体との関係を通した身体観を数値化することを目的とした。「自動車」「工場」の比喩は機械論的身体観を反映し，「木」「海」は生気論的身体観を反映すると仮定した。後者は「生（生きる）」の側面を重視して身体，人間を理解しようとする傾向である。また「自動車」は「工場」以上に，同様に「海」は「木」以上に動的存在であることを重視している。最後の「神殿」は神聖性，清浄性，宗教性を重視した身体観である。

図２は，３ヶ国別の各比喩に対する平均評定値を示している。評定値の３以下は否定的，４以上は肯定的評価となることから3.5を否定－肯定のの境界線であるとみなすと，日本人学生は「木」「自動車」「工場」に肯定的評価を下し，「海」「神殿」に否定的評価を下したといえる。分散分析を行ったところ，比喩の主効果は有意であり（$F(4/928) = 152.03$, $p<.001$）であり，Fisher の PLSD による下位分析をおこなったところ，「木」「自動車」間を除くすべての組み合わせにおいて有意差がみられた（$ps<.001$）。

同様に韓国人学生についてみていくと，「木」「自動車」「工場」「海」に肯定的評価を下し，「神殿」に否定的評価を下した。分散分析の結果は，比喩の主効果が有意であり（$F(4/380) = 82.05$, $p<.001$）であり，Fisher の PLSD を用いた下位分析では，すべての組み合わせにおいて有意差がみられた（$ps<.05$）。台湾人大学生の場合も同様に，比喩の主効果が有意であり（$F(4/880) = 55.182$, $p<.001$）であり，Fisher の PLSD を用いた下位分析では，「木」と「工場」間を除くすべての組み合わせにおいて有意差がみられた（$ps<.05$）。また，比喩別に３ヶ国間の比較を行うと，「自動車」を除く4つの比喩において国の主効果が有意であった（「木」$F(2/492) = 8.676$, $p<.001$；「工場」$F(2/492) = 19.051$, $p<.001$；「神殿」$F(2/492) = 89.41$, $p<.001$；「海」$F(2/492) = 9.849$, $p<.001$）。

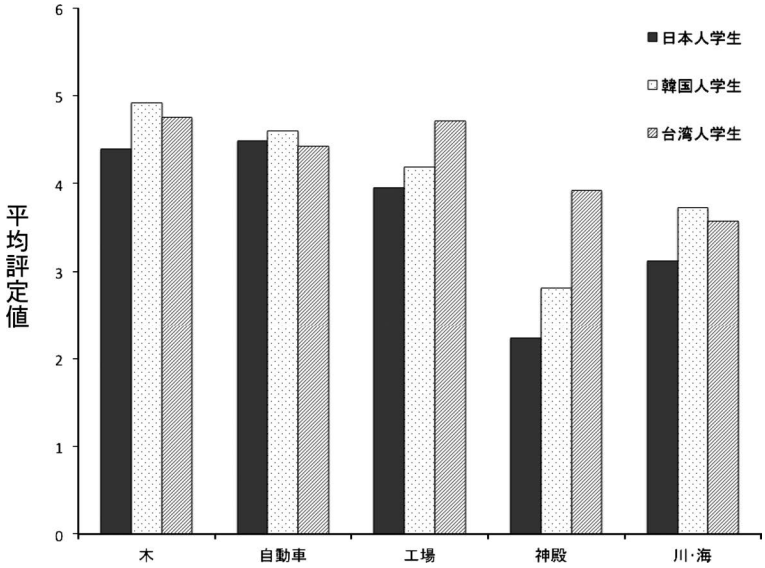

図 **2** ： **5** つの比喩に対する同意の平均評定値

これらの結果からどのようなことが考えられるだろうか。韓国人学生は「木」「川・海」の値が他の 2 ヶ国の学生よりも高い。すなわち生気論的人間観の傾向が高いことが示唆される。台湾人学生において特徴的なことは，「神殿」の値が高いことである。身体の神聖性，清浄性，宗教性を重視した人間観をもつ傾向が高いといえよう。一方の日本人学生においては「神殿」の値は他の 2 ヶ国の学生と比較してもっとも低い。身体の神聖性，清浄性，宗教性を重視した身体観を有しない傾向にあると言えよう。

3-4.　食物に対する態度と食行動

「食べものと食べることについて書いてある，次の文章を読んで，以下の尺度で評価してください。(1) 強くそう思わない，(2) そう思わない，(3) どちらでもない，(4) そう思う，(5) 強くそう思う」と教示し，6 項目について回答することを求めた。これらの項目は，3 ヶ国の学生の食物に対する態度と食行動，食習慣の差異を検出することを目的に設定したものである。

3-4-1.　共食

項目文「家族や友人と食べものを分けあって食べるのが好きです」に対する同意の程度ならびに分散分析の結果を表 5 に示す。男女差はみられず国の主効果が有意であった。他の 2 ヶ国と比較して日本人学生の値が低いという結果であった。

3-4-2.　水道水

項目文「水道水ではなくボトル入りの水の方を好みます」に対する同意の程度ならびに分散分析の結果を表５に示す。男女差はみられず国の主効果が有意であった。他の２ヶ国と比較して台湾人学生の値が低いという結果であった。これは台湾人学生は他の２ヶ国の学生と比較して，水道水の水を飲むことに抵抗感が低いということを示している。

3-4-3.　食事中の飲料

項目文「食事をしている時には何も飲みません」に対する同意の程度ならびに分散分析の結果を表５に示す。男女差はみられず国の主効果が有意であった。他の２ヶ国と比較して日本人学生の値が低いという結果であった。

3-4-4.　体重

項目文「太ることを気にしています」に対する同意の程度ならびに分散分析の結果を表５に示す。国の主効果は見られず，性の主効果が有意であった。３ヶ国共通して，女子の値が男子よりも高いというものであった。

3-4-5.　朝食

項目文「朝食には，昼食や夕食に食べるものとは違う食べものが必要です」に対する同意の程度ならびに分散分析の結果を表５に示す。国，性の主効果および国と性の交互作用のいずれも有意ではなかった。この設問は，一日の開始時に摂取する食事（朝食）について，固定されたメニューを構成をしているかどうかを問うことを意図していた。例えば，日本人学生ならば「トーストとコーヒー」，台湾人学生ならば「白粥と油条」といったメニュー構成で

表５：食物に対する態度と食行動

		共食	水道水	食事中の飲料	体重	朝食	GMO
日本人学生	男子	3.64	3.47	3.64	4.06	3.18	2.24
	女子	3.53	3.29	3.53	3.09	2.91	2.38
韓国人学生	男子	4.48	3.93	4.48	3.95	2.93	1.86
	女子	4.08	3.55	4.08	3.43	3.00	2.11
台湾人学生	男子	4.69	2.57	4.69	3.77	3.08	2.21
	女子	4.44	2.91	4.44	2.82	3.31	2.28
F	国	*38.346*	*18.223*	*38.346*	*2.838*	*0.945*	*2.593*
	性	*5.984*	*0.297*	*5.984*	*35.810*	*0.006*	*1.687*
	国×性	*0.694*	*2.516*	*0.694*	*1.026*	*1.406*	*0.193*
有意性	国	*<.001*	*<.001*	*<.001*	*ns*	*ns*	*ns*
	性	*ns*	*ns*	*ns*	*<.001*	*ns*	*ns*
	国×性	*ns*	*ns*	*ns*	*ns*	*ns*	*ns*

ある。しかしながら，設問文が抽象的でありすぎた為に，意図が十分に伝わらなかった可能性が高い。

3-4-6.　GMO

項目文「食べものに，遺伝子組み換え材料が使われることに賛成です」に対する同意の程度ならびに分散分析の結果を表 5 に示す。国，性の主効果および国と性の交互作用のいずれも有意ではなかった。全調査参加者の平均値は2. 18であり，GMO に対しては 3 ヶ国の学生に共通して否定的であることが示された。

3-5.　食べることの重要性

食は日々の生活の中でどの程度に重要なものとみなされているだろうか。この疑問に対する答えを得ることを目的に「費用が同じであるとしたら，素晴らしい食事の普通のホテルに泊まることと，普通の食事の豪華なホテルに泊まることと，どちらがいいですか？」と問い，「a）素晴らしい食事の普通のホテル，b）普通の食事の豪華なホテル」のいずれかを選ばせた。図 3 に，3 カ国の選択者比率を性別に示した。日本人学生と台湾人学生はほぼ同様な結果であり，男女ともに a）のホテルを選択する率が高かった。しかしながら韓国人学生は男女ともに b）のホテルを選択する傾向が高く，特に韓国人学生女子は半数以上の者が b）のホテルを選択した。

韓国人学生（特に女子学生）が他の 2 ヶ国の学生と比較して，特徴的な回答となったこと

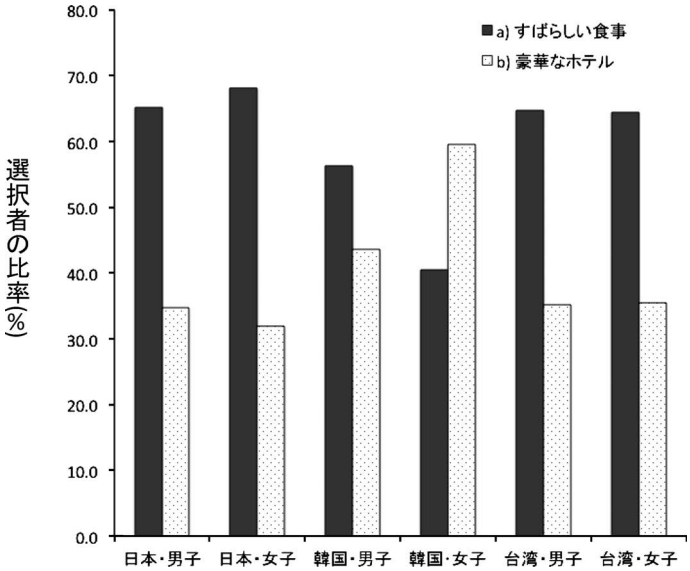

図 3 ：「すばらしい食事」と「豪華なホテル」の選択者比率

については解釈が困難である。食べることによって得られる快（pleasure）を低く見積もっているのか，食べること以外によって得られる快を高く見積もっているのかについては不明である。韓国の女子学生は日本の女子学生と比較して美容整形に対して好意的評価を行い，また自らが美容整形を行うことに躊躇する傾向が低いと言われる。このような外見を重視する傾向が反映されている可能性もある。今後さらなる検討を加えることにより，今回の結果がどのような心的要因に基づくものであるかが明らかになるであろう。

3-6.　重視する食の属性

「食事を楽しむために重要なことは何でしょうか。最も重要（4），重要（3），どちらでもない（2），重要でない（1），まったく重要でない（0）の５段階で評価してください。」と問い，「食物の見た目」（見た目と略す。以下同），「（食卓や皿の上における）食物の配置の仕方」（配置），「それぞれの食物の味」（味），「最近注目されていたり流行している食物であるかどうか」（流行），「いろいろな食物を一緒に食べられること」（混合），「健康に好ましい食物であること」（健康度），「多種多様な食物を食べることができること」（多様性），「食物の香りや匂い」（ニオイ），「たっぷりと食物があること」（量の多さ），「食物の食感（歯ざわり，舌ざわり）や温度」（テクスチャー）の10項目を与えた。

図４に，３カ国別のレーダーチャートを示した。日本人学生と台湾人学生の評価は比較的類似しているが韓国人学生の評価は全項目にわたり低いことがわかる。項目別に分散分析をおこなったところ，国の主効果はすべて有意であり（$Fs=30.222\sim76.692$，$ps<.001$），下位検定においてもすべての項目において韓国人学生と日本人学生間，韓国人学生と台湾人学生間に有意な差がみられた（$ps<.001$）。上記した分析（3-5 食べることの重要性）において，

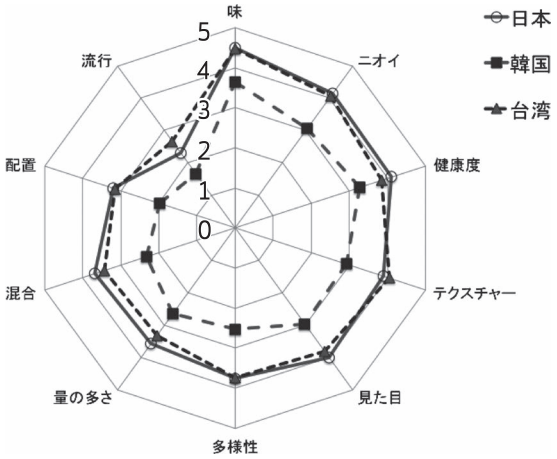

図４：５つの比喩に対する同意の平均評定値

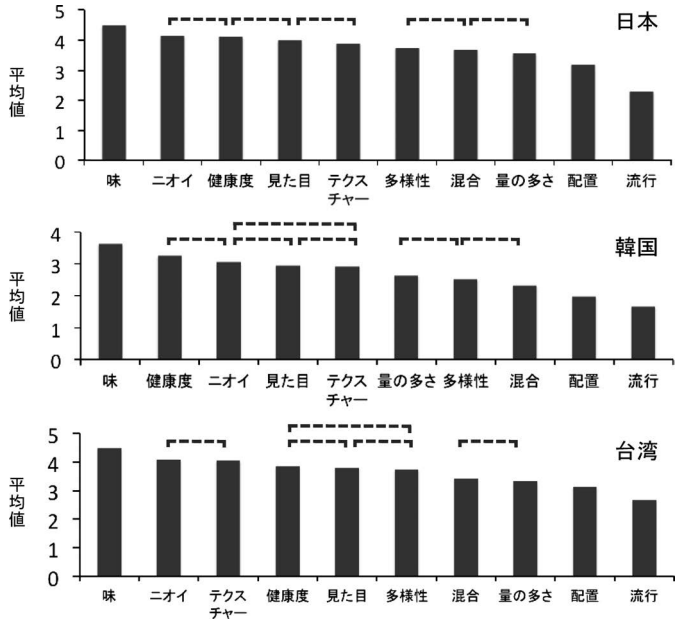

図 5 ：重視する食の属性。点線は有意差の見られないことを示す。

韓国人学生は日本人学生および台湾人学生と比較して食べることの重要性を低く評価している可能性が示唆された。本設問においても，それを肯定する結果が得られたと言えよう。

図 5 は国別に，重視する程度の高い項目から順に，平均評点を示したものである。国別に分散分析をおこなったところ，項目の主効果はすべて有意であった（日本：$F(9/2052)=135.892$，$p<.001$，韓国：$F(9/630)=52.305$，$p<.001$，台湾：$F(9/1881)=96.981$，$p<.001$）。下位検定の結果については，有意な差が見られなかった項目間を図 5 上に点線で表示した。点線表示のない組み合わせはすべて有意な差（$ps<.05$）が見られたということを示している。

10項目の得点順序は 3 カ国で比較的類似したものとなった。相対的に最も高い評点であった項目は「味」であり，逆に最も低い評価であったものは「配置」「流行」であった。それら 3 項目以外の 7 項目については 3 カ国間において得点順序が異なった。

日本人学生と韓国人学生は，台湾人学生と比較して，得点順序においてより類似した結果となった。「味」につづく第 2 のグループは「ニオイ」「健康度」「見た目」「テクスチャー」であり，それに続く第 3 のグループは「多様性」「混合」「量の多さ」であった。台湾人学生の場合は，「味」につづく第 2 のグループは「ニオイ」「テクスチャー」であり，第 3 は「健康度」「見た目」「多様性」，第 4 は「混合」「量の多さ」となった。「テクスチャー」が上位に位置したこと，また「ニオイ」「テクスチャー」が「味」につづく高評点であったことは，日本人学生，韓国人学生と比較して台湾人学生は，食物（料理）の感覚属性をより以上に重

視していることを示唆している。

日本人は料理の見た目（本設問での「見た目」「配置」）を重視し，韓国さらに台湾の人々はさまざまな食材を混ぜ合わせて食べることを好む（本設問では「混合」）と言われる。本結果は，そのような一般的言説を肯定するものではない。むしろ３カ国の学生らが食に重視する項目順はきわめて類似しているといえよう。このことが大学生という世代に特徴的なものであるのかどうかについては不明である。

3-7.　食の獲得・受容場所

３カ国の学生らが実際に食事をとっている場所を問うために「食事をとるために，下記の場所・店舗をどの程度の頻度で利用されるでしょうか。週に５日以上（1），週に３－４日（2），週に１－２日（3），１ヶ月に数回（4），半年に数回（5），一年に数回（6），ほとんど利用しない（7）の７段階で評価してください。」という設問を設け，日本人学生には「コンビニエンスストアー」（コンビニと略す。以下同），「気軽に入店できる洋食の店」（西洋 R），「気軽に入店できる和食の店」（自国 R），「フードコート（デパートやショッピングセンター内にある飲食フロアー）」（カジュアル），「洋食をだすファーストフード（ハンバーガー，フライドチキン，ドーナッツ店など）」（西洋 F），「和食をだすファーストフード（牛丼，回転寿司，立ち食い蕎麦屋など）」（自国 F），「マクドナルドなどのハンバーガーチェーン店」（マクドナルド），「スターバックスなどの今風コーヒーチェーン店」（スターバックス），「屋台」（屋台），「昔からある喫茶店」（伝統 C）の10項目を与えた。なお，韓国人学生ならびに台湾人学生らには，上記項目で表記されている「和食」をそれぞれ「韓国の食」「台湾の食」と変更し，それぞれに例示した具体的な料理名も変更した。

結果の分析にあたっては，それぞれの項目と共に表示した番号を得点と見なし，項目毎の得点を算出した。図６（左）は，それらの平均得点を国別にレーダーチャートで図示したものである。さらに，国毎の平均点（標準偏差）が異なるために，国別に項目得点を z 得点で表示したものが図６（右）である。日本人学生は「コンビニ」「自国 F」の利用頻度が相対的に高い（z 得点が高い）ことがわかる。また韓国人学生は「屋台」「伝統 C」の利用頻度が相対的に高く，「西洋 R」「自国 R」の利用頻度が相対的に低い。台湾人学生は韓国人学生同様に「伝統 C」の利用頻度が相対的に高い。また「マクドナルド」の相対的利用頻度は３カ国で変わらないが，「スターバックス」については台湾人学生の相対的利用頻度がもっとも高くなった。

本設問は，３カ国の学生が実際に利用しているであろう食物の獲得・受容場所を，西洋－自国，簡便，伝統の３軸から特徴づけることができるかどうかを意図して作問された。韓国人学生は西洋食の受容に消極的な傾向にあり，簡便性と自国の伝統を重視していること

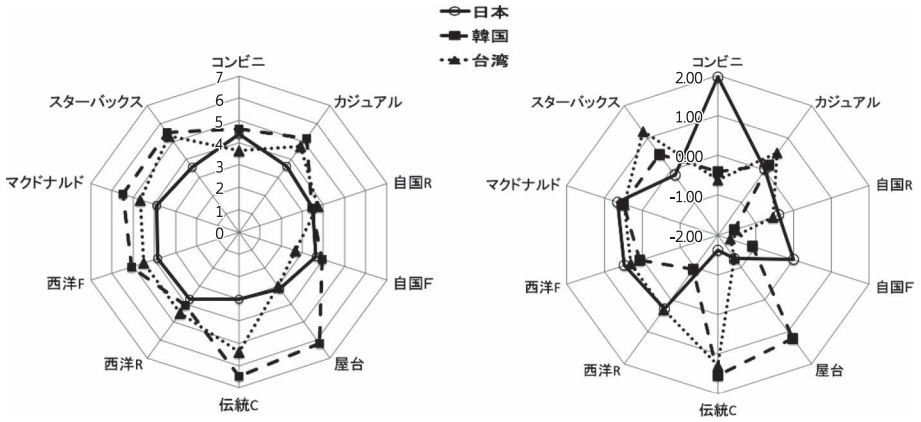

図 **6**：食物の獲得・受容場所の利用頻度。左は平均値を示し，右は平均値を標準化した z 得点を示す。

がうかがわれる。台湾人学生は，逆に西洋食の受容に積極的であるといえよう。日本人学生は簡便性のみを重視しているように思われる。

3-8.　食の獲得・受容場所の健康度評価

「下記の場所・店舗で出されている食物や飲み物についてあなたはどのように評価しますか。下記の基準にしたがい該当する番号を記入して下さい。」と教示し，「4：健康に好ましい食物や飲み物が売られている」「3：どちらかというと，健康に好ましい食物や飲み物が売られている」「2：どちらかというと，健康に好ましくない（害のある）食物や飲み物が売られている」「1：健康に好ましくない（害のある）食物や飲み物が売られている」「0：わからない」の基準を与えた。評価対象とした項目は上述の「3-7. 食の獲得・受容場所」と同じ10項目であった。

表 6 は，国別にそれぞれの項目に対する平均点ならびに分散分析の結果を示したものである。健康－不健康評価の中点を1.5と見なすと，日本人学生（2.22），韓国人学生（2.06），台湾人学生（2.37）とも2.0以上の評点を与えていることから，全体としては「健康に好ましい」と評価しているといえよう。3 カ国全体の平均値で比較すると，得点のもっとも低い項目は「マクドナルド」（1.78）であり，それに「西洋 F」（1.86）が続いた。逆に得点のもっとも高い項目は「西洋 R」（2.47）であり，それに「自国 R」（2.47），「自国 F」（2.45）が続いた。

国別に10項目の評点を z 得点化し，それらをレーダーチャート化して示したものが図 7 である。日本人学生は「マクドナルド」「西洋 F」「コンビニ」の z 得点が低く，「自国 R」「伝統 C」の z 得点が高くなった。台湾人学生も日本人学生と比較的類似したパターンを示しており，「マクドナルド」「西洋 F」の z 得点が低く，「西洋 R」「自国 R」の z 得点が高くなっ

表 6 ：食の獲得・受容場所に対する健康度評価

項　目	平均評点			*F* 値			有意性			下位検定
	日本	韓国	台湾	国	性	国×性	国	性	国×性	
コンビニ	2.01	2.36	2.37	*11.84*	*0.28*	*2.07*	***	*ns*	*ns*	T＝K＞J
カジュアル	2.13	2.20	2.58	*13.47*	*0.45*	*0.14*	***	*ns*	*ns*	T＞K＝J
自国 R	2.97	1.54	2.77	*114.07*	*0.14*	*2.26*	***	*ns*	*ns*	J＝T＞K
自国F	2.35	2.28	2.71	*15.57*	*0.23*	*2.87*	***	*ns*	*ns*	T＞J＝K
屋台	2.24	2.24	2.17	*0.63*	*4.52*	*1.30*	*ns*	*	*ns*	J＝K＞T
伝統 C	2.69	1.40	2.34	*89.53*	*0.38*	*4.76*	***	*ns*	**	J＞T＞K
西洋 R	2.39	2.20	2.82	*25.45*	*0.07*	*0.16*	***	*ns*	*ns*	K＞T＞J
西洋 F	1.73	2.07	1.79	*8.63*	*2.38*	*0.68*	***	*ns*	*ns*	K＞T＝J
マクドナルド	1.56	2.03	1.74	*15.94*	*1.84*	*2.19*	***	*ns*	*ns*	K＞T＝J
スターバックス	2.15	2.31	2.43	*6.16*	*1.38*	*4.17*	**	*ns*	*ns*	T＝K＞J

$^{*}p<.05$，$^{**}p<.01$，$^{***}p<.001$

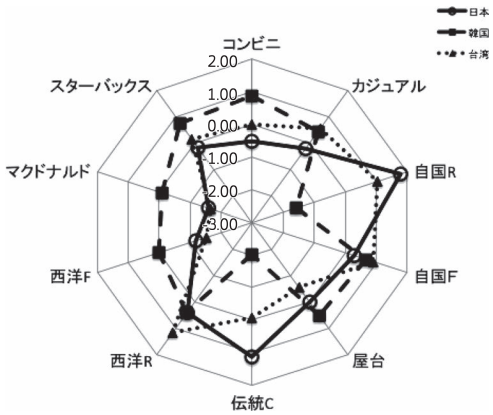

図 7 ：食物の獲得・受容場所に対する健康度の評価。国別に10項目の平均値を標準化し，ｚ得点で示した。

た。韓国人学生は，日本人学生，台湾人学生と大きく異なり，「伝統 C」「自国 R」のｚ得点が低く，「コンビニ」「スターバックス」のｚ得点が高くなった。

図 7 から分かるように，韓国人学生は日本人学生，台湾人学生と比較して，「西洋 F」「マクドナルド」「スターバックス」「コンビニ」の健康度を相対的に高く評価する傾向にあった。先の分析（3-7．食の獲得・受容場所の項参照）では，「韓国人学生は西洋食の受容に消極的な傾向にあり，簡便性と自国の伝統を重視していることがうかがわれる。」と述べたが，韓国人学生は，健康度の評価においては自国の料理よりも西洋の料理の方を高く評価している

ことがうかがわれる。

日本人学生は，先の分析（3-7. 食の獲得・受容場所の項参照）において，「コンビニ」の相対的な利用頻度が高いという特徴があると述べた。しかしながら健康度評価においては「マクドナルド」に続く低い評価であった。日本人学生の「コンビニ」利用は，健康度以外の要因（簡便性や価格など）によるものと考えられる。健康には好ましいとは言えないが仕方なく利用しているというのが実体であると考えられる。

3-9.　食の伝統と現代の食

「昔から食べられてきた食べものや飲み物と，現在の（あるいは外国からやってきた）食べものや飲み物について，あなたはどのように感じておられるでしょうか。あなたの気持ちにもっともよく当てはまるものを一つ選んで下さい」と問い，「１：昔から食べられてきた食べものや飲み物が１番よい」「２：昔から食べられてきた食べものや飲み物が，かなりよい」「３：どちらかというと，昔から食べられてきた食べものや飲み物がよい」「４：昔から食べられてきた食べものや飲み物が，ややよい」「５：両方ともよい」「６：現在の（あるいは外国からやってきた）食べものや飲み物が，ややよい」「７：どちらかというと，現在の（あるいは外国からやってきた）食べものや飲み物がよい」「８：現在の（あるいは外国からやってきた）食べものや飲み物が，かなりよい」「９：現在の（あるいは外国からやってきた）食べものや飲み物が１番よい」の９選択肢を与えた。

３カ国の学生らの平均値は，台湾人学生がもっとも高く4.85であり，それに日本人学生4.46，韓国人学生4.35が続いた。分散分析をおこなったところ国の主効果が有意であったので（$F(547, 2) = 4.74$，$p<.01$），下位検定（フィッシャーの LSD 検定）をおこなったところ，台湾人学生と日本人学生間および台湾人学生と韓国人学生間に有意差（$p<.05$）が見られた。平均値が5.0に達していないことから，３カ国の学生は共通して「食の現在」にやや否定的であるといえよう。さらに３カ国間の中においては，台湾人学生が比較的「食の現在」に肯定的であるといえる。

ま　と　め

本調査は地理的，歴史的，文化的，民族的に近い位置にある日本，韓国，台湾都市部に生活する大学生を対象に，その食態度，食行動の諸相を検証するものであった。彼ら（彼女ら）は調査時点で19歳から20歳代前半の年齢であり，そのライフスタイルは一見するときわめて類似している。はたして食の側面から，彼らの類似性，差異をどこまで明らかにしていくことができたであろうか。以下では，本調査結果を順をおってまとめていきたい。

1.「食べもの」という言葉からの連想される最頻出語は3カ国に共通して「コメ（米，白米，ごはんを含む)」であった。次に連想される言葉は，国によって異なり，韓国人学生は「キムチ」，台湾人学生は「麺（牛肉麺，ビーフン，うどん，ラーメンなどの麺料理全体を含む)」，日本人学生は「おいしい」であった。少なくとも3カ国において「コメ」は食を象徴する役割を果たしているといえよう。

2. 韓国人学生にとって，「食べもの」という言葉から喚起されるイメージは圧倒的にアジアの食であり，特に自国の韓国料理であった。食が民族的，国家的自己同一視の手段となっていると考えれば，韓国人学生は他の2カ国の学生以上に民族，国家への帰属意識が高いといえよう。

3. 理想の食事が叶えられるとするなら，いつの時代のどこへ行きたいかという質問をおこなった。同時に，もっとも行きたくない時代，場所を尋ねた。自由記述であった為に，その回答内容は3カ国で相当に異なった。韓国人学生は過去の時代の自国へ行きたいとする回答内容が多く，自国への帰属意識の強いことをうかがわせた。台湾人学生は，行きたいところは過去の中国であり，行きたくないところは現在の中国であるとする回答が目立った。中国に対する両価感情（ambivalent feeling）をもつものといえよう。

3カ国の学生は共通して，行きたくない時代を過去，行きたくない場所を自国・アジア・西洋以外の地域とする傾向が見られた。総じて「食の現在」を肯定しているといえよう。

4. 5つの比喩（metaphor）への同意の程度を問うことにより，機械論的身体観と生気論的身体観のいずれを好むかを測定した。アメリカ，ヨーロッパで同様な調査をおこなうと，アメリカ人は「自動車」に同意する傾向が高く，ヨーロッパの人々は「木」に同意する傾向が高くなる。今回の調査対象である3カ国の学生は，機械論的人間観と生気論的人間観を併存させる傾向が見られた。その中でもやや特徴的な結果は台湾人学生である。「工場」（機械論的人間観）への同意傾向が高い一方で，「神殿」（聖的人間観）への同意傾向も高かった。仏教に代表される信仰の程度が反映されている可能性が考えられる。

5. 食物の獲得・受容場所については，3カ国の学生で異なったパターンが見られた。日本人学生は「コンビニ」の相対的な利用頻度の高さに，韓国人学生は「屋台」「伝統C」の相対的な利用頻度の高さに特徴があった。台湾人学生は，「伝統C」「スターバックス」の相対的な利用頻度の高さが特徴的であった。

しかしながら，必らずしもこれらの場所で提供される食物が健康的であるとは評価されていない。日本人学生の「コンビニ」の健康度評点は低く，韓国人学生の「伝統C」の健康度評点も低い。健康度評価において特徴的な点は，韓国人学生が西洋食（「西洋R」「西洋F」「マクドナルド」「スターバックス」）の健康度を，他の2カ国の学生と比較して，高く評価している点である。また対照的に「伝統C」「自国R」の健康度評点は低かった。韓国人学生

は，西洋食の健康度を高く評価する一方で自国の食の健康度を低く評価する傾向にあるといえよう。

フードシステムの巨大化，国際化，垂直構造化に伴い，世界の多くの諸都市において食の供給形態は大きく変化しつつある（今田，2012，2013）。食を受容する生活者側の視点に立てば，そのような「食の現在」をいかに受け入れるかということは大きな問題であり日々の課題でもある（今田・長谷川・田崎，2012）。本調査結果は，そのような「食の現在」を，部分的とはいえ，理解していくことを可能とするものである。

参　考　文　献

今田純雄（2013）．沖縄－食の混乱と収束，中根光敏・今田純雄共編，グローバル化と文化変容，いなほ書房（印刷中）．

今田純雄（2013）．フードシステムに取り込まれる食，根ヶ山光一他編，子どもと食：食育を超えて，東京大学出版会（印刷中）．

今田純雄・長谷川智子・田崎慎治（2012）．家族の食卓と子育て（1）：飽食環境の母親，広島修大論集，53，81–109.